

授業初日

2019年3月4日(日) 天気、晴れ

今日から漸く開始。教室は私の宿舎から校庭を挟んで100m先にある教学楼の3階だった。朝8時からの授業が、午前中に二コマ用意されていた。この日は初級口語とヒアリング。最初の口語の授業の担当は劉先生（以後は中国風に老師と呼ぶ）、中年女性で我々の担任だった。この日クラスメートとなる留学生の関心は、互いにどんな学生と出会いどんな先生と出会うかだったと思う。日本の高校の普通教室の半分位のスペースに、20人くらいが詰め込まれた。廊下との壁に黒板が設けられ、背には校庭に面する側に窓。日本とは違う配置だった。

留学生の最大グループは韓国で7人。次が日本で私を含め6人。その他、フランス、米国が2人。英国、パキスタンが1人。日本の大学生、小島君は他のクラスへ移り、一方で後からロシア、モンゴルの青年が加わった。私以外の日本人は中年に入る前の社会人男性、植松さんと長井さん。そして岐阜の短大から来た原さんと田中さん。この二人は、若い。白人で目立つのが北アイルランドから来た Gavin 君、黒人で目立つのが途中でいなくなってしまうが、テキサスから来た Lewis さん。こうした仲間とは、自然と英語でやり取りすることになった。



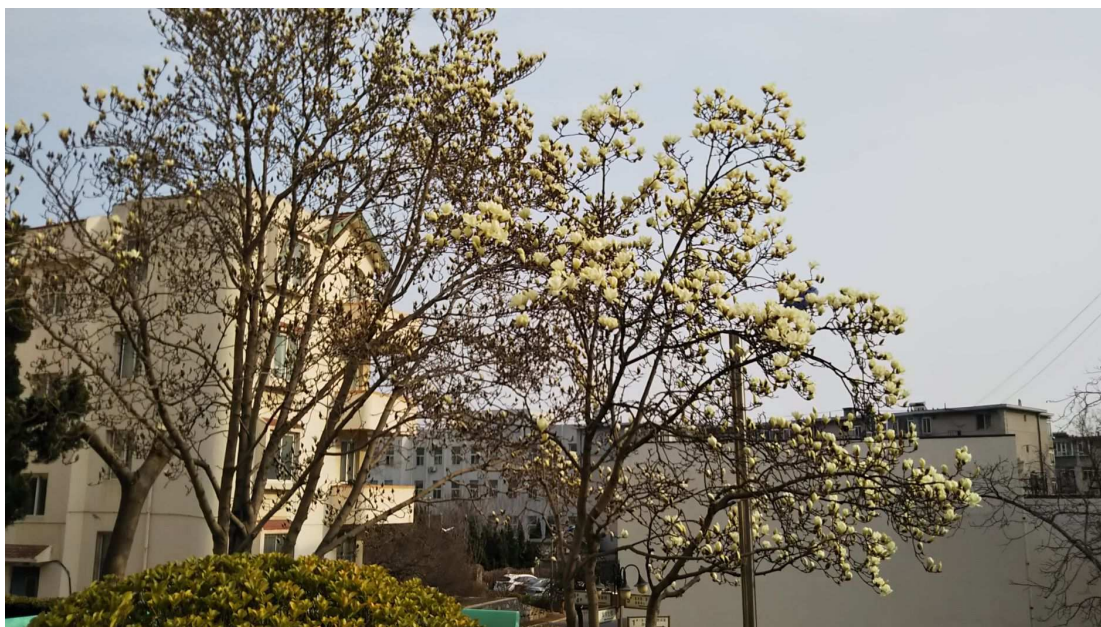
教室は建物の中央を貫く廊下に面して黒板を置いていた。発表授業の風景。

こうした仲間の中で、学期を通して存在感があったのは、韓国の社会人世代の三人、それに日本人学生の中心で班長になった植松さんだった。彼らは学期中、ほぼ休むこともなかった。ソウルから来た韓国の三人は、それぞれ個性があっ

た。一番目立ったのは、金珉珠。飛び出しそうな大きな目。いつも絶やさなかった笑顔が印象的だった。金といつも一緒に行動していた韓美延は、大人しい性格。**Beauty of Orient** とでも表現できる、アジアの香りのする美しい娘。そして、企業からの派遣の形で来た金晨星も愛想がよく、英語ができるので最初からコミュニケーションを取りやすかった。植松君は、中国との取引のある会社に勤めていたそう。大連を含め中国の都市に出張で何度も来ていたとか。日本人の中では一番学習に意欲的な学生だった。

そして私はどういう位置にいたかと言うと、まず高齢者の学生は私しかいなかった。だから、何となくこの教室でも傍観者の位置にいたと思う。一方で欧米の学生とも拙い英語でやりとりでき、職業柄、学校や教室と言う場に慣れていた私には、年齢のハンディはそれほどなかったのかもしれない。

ところで、私の様な高齢者の留学という点では、この大学は以前から熟年世代の学生を受け入れて来たし、この時も、他のクラスには一人か二人在籍していた。キャンパスで歩いていても、日本人だけでなく韓国からの同世代の学生と会い、話を交わすこともあった。大学側も以前は年齢制限も設けず、受け入れて来たと言う。こうした傾向は大連の他の大学でも見られたが、一昨年だったか、市内の大学で70歳の高齢者の学生が倒れることがあったそう。それで65歳の年齢制限を課すようになったとか。キャンパスには70近い年齢の学生もいたのだが、すでに何度かこちらへの留学歴があった人たちだった。



3月下旬、宿舎の前ではモクレンの花が漸く開いた。